

行政区の記念誌をつくる

人口減少、災害危険区域等の影響で閉区を余儀なくされる行政区も中にはあります。ふるさとを思い返し、後世に語り継いでいけるよう、記念誌をつくってみませんか。

▶ 効果

- 将来にも残る貴重な資料となる
- ふるさとを思い返す契機となる

事例 南右田行政区閉区記念誌 ありがとう南右田 南相馬市鹿島区南右田

東日本大震災に伴う津波によって全戸が流失し、54名もの尊い命が失われた南右田行政区。2017年3月25日、閉区式とともに行政区の再編が実施されました。南右田で生まれ育って暮らした思い出を永遠に忘れることなく後世に伝えるために、区長をはじめ行政区の方々協力し合い、南右田の歴史をふり返るための記念誌を2017年11月25日に200部発行し、行政区民や近隣行政区へ配布しました。

南右田の由来、神社、思い出アルバム、住民17名の顔写真付き作文、南右田神社遷座式・閉区記念植樹式・閉区式の写真、震災犠牲者名簿、歴代行政区長…等が収録されています。



公会堂を気軽に 使える場所にする

行政区ごとにある公会堂やコミュニティセンターは、家から一番近くで地域と関われる場所となり得ます。また、点々散り散りになった元行政区の住民の方々にとっても集まれる場所となります。一方で、公会堂の状況は、津波で流失した、元々集会施設がない、傷んで利用できない…等、行政区によって異なっています。公会堂やそれに代わる場所を、その場所を必要とする人みんなが使いやすいものにしていきましょう。

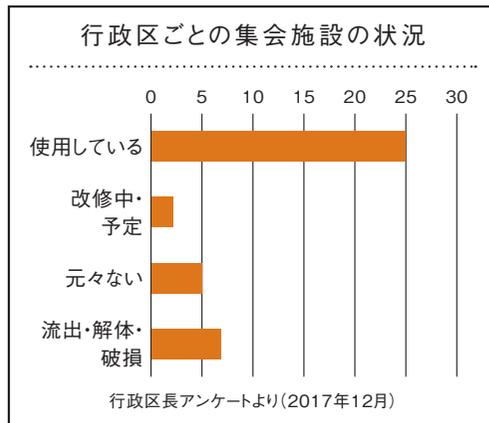


公会堂の使い方をみんなで考える

月に一度は開放日を設ける、鍵係を輪番制にする、清掃日をつくる、帰還準備をする方の宿泊場所とする等、様々な可能性を話し合い、ルールを決める。近隣行政区同士で助け合い、分かち合えたら理想的です。

▶ 効果

- 人口減少後も維持続けられる公会堂にする
- 帰還の準備やお墓参りに来た方の休憩場所になり得る



事例 高齢化社会に対応した公会堂に 上浦公会堂

高齢化社会に対応していくため、畳敷きだった床をフローリングにし、入口にはスロープが設けられるなど、バリアフリーの公会堂に改修されました。2018年2月25日には、改修を記念して伝統の神楽が奉納され、上浦の方々が集まる機会となりました。



↑上浦公会堂に設置されたスロープ



↑改修を祝って公会堂内で奉納された神楽

つどいの場をつくる

今次災害で特に問題となっているのが、家族の離散と言われています。集落部で高齢一人暮らしの人も中にはいます。このような時だからこそ、地域ごとに様々な形のつどいの場が必要です。つどいの場と言っても、サロンに限らず、スポーツを介した集まりもあり、室内のみならず、屋外ということも有り得ます。地域に合ったつどいの場をデザインしていきませんか。



提案

12

サロンに変化をもたせる

みんなでおしゃべり、お茶っただけでも十分楽しいですが、例えば以下のようなメニューを取り入れるなど、いつものサロンに少しだけ変化をもたせてみませんか。



▶メニュー

- 歌をうたう ● 脳トレ (間違い探しの載った本や新聞を印刷してみんなで競争してみましょう。)
- ラジオ体操 ● 手づくり教室 ● お花見 ● ピクニック
- 地域の劇団、音楽家を呼んだミニ演奏会

事例 地域力を集結 手づくりゴルフ場

小屋木行政区 『絆の楽園』

地権者含む住民有志の方々が、地区に帰ってきた人たちのふれあいの場をつくりたいと立ち上がり、2017年上半期から、運動にもなりみんなの元気な姿が見られるパークゴルフ・グラウンドゴルフ場づくりが始まりました。農業振興地域の転用の申請をしてから許可が下りるまでに半年以上かかってようやく、重機をもつ方の協力も得ながら、草刈り等の整備をどんどん進めました。小さなハウスやトイレ等も、住民有志の方が提供し、みんなの「絆の楽園」が出来上がりました！場所は、小高区上根沢原畑地内で、行政区内のみならず、桃内地区、鹿島区、浪江町からも参加者がいるそうです。



↑ 2017年11月、絆の楽園

提案

13

先生を招いたサロンをする

市内には様々な形でサロンを支援して下さる方がいます。例えば、市の保健師さんは、一団体につき年間3回まで、サロンに来てくれます。まちづくり出前講座では、市内10人以上の団体を対象に、市民ボランティア講師が出向いて様々な講習を開いてくれます。

▶メニュー

- 保健師 問合せ先：南相馬市健康づくり課 TEL：0244-24-5336
- まちづくり出前講座 問合せ先：南相馬市文化スポーツ課 TEL：0244-24-5249

事例 地域に先生！ みんなで貯筋！

小谷行政区 小谷スポーツサークル

2017年7月13日より、毎週木曜9時半～11時45分、小谷集落センターにて、小谷行政区内の方が運動を教える先生となり、音楽に合わせた様々な体操を行うスポーツサークルの活動が始まっています。血圧測定・ラジオ体操・ボールやダンベル、タオルを使った運動、ロコモ体操など、飽きることのないように試行錯誤されたメニューであつという間の2時間です。毎回20名程度(小谷・大井・大富・小屋木行政区等)、通算285名(2017年12月28日時点)の方が参加されています。実施にあたり、市の補助金を活用し、音楽機材、ボール等の必要物品をはじめにそろえました。活動は口コミで広がり、他行政区からも参加者がみられ、男女分け隔てなく、楽しく健康維持ができる場になっています。



↑ 2018年2月8日、ラジオ体操の様子

転出者・外部との つながりをつくる

行政区外に住むことを決めた方は、自ら進んで選んだことではない方が大半だと思います。そういった方々が生涯、心の拠り所と思えるような行政区であるとときに、何かあった時などに力になってもらえる関係性を築くことが必要になってくるのではないのでしょうか。また、震災を機に、外部から企業や研究者、学生等、様々な立場の方とのご縁もできています。それを資源と捉え、行政区にとってプラスな力に変えていくことが重要です。



提案

14

行政区だよりをつくる

行政区の美しい風景や出来事を定期的にまとめて、公会堂に張り紙をしたり、お便りとして希望者へ届けたりするなど、行政区の今の状況を外へ発信していきませんか。

- ▶ 効果
- ふるさとの様子が気になって
いる避難者の方々とつながり維持
- 外部支援者等とつながる契機となる
- 記録として残る

▶ 浦尻未来検討会ニュースを全戸へ配布

浦尻未来検討会 NEWS No.1
2017年6月7日 小高復興デザインセンター

浦尻未来検討会、はじまりました！

浦尻未来検討会は、3月の大字会にて承認された、浦尻の未来を考える場です。浦尻行政区と小高復興デザインセンターが共催し、9月まで月1回のペースで集まり議論していきます。

浦尻の土地のマネジメント計画
(センターからの提案の骨子)

- 営農する農地
- 管理する農地
- 宅地
- 公共用地

「さんぼみち」を作る
・維持管理のルールを作ってみる
・空き家を集落で活用する
・管理の度合いを土地ごとに決める

アンケート調査のお知らせ
農地の利用・管理の意向を把握するため、市が農地所有者等を対象に6月ごろに行なうアンケート調査に合わせて、浦尻では、より詳しい調査票を同封します。浦尻行政区の重要な資料となりますので、ご回答をお願いします。

第1回目は5月21日に公会堂で開催され、10人の方に出席いただきました。

第1回目は、自己紹介の後、センターから、左の図のように「浦尻の将来の土地との付き合い方」についての提案を行い、議論しました。

もとの行政区と避難先・移住先を往来し続ける人たちの声

A氏 70代男性
東部地区

自宅は原町区に再建したが、納屋は残して改修し、休憩スペースとして週1回程度通っている。

B氏 70代男性
西部地区

自宅は震災で壊れ、母屋を解体した。小高区の災害公営住宅に住みながら、日中は戻って庭づくりをしている。

C氏 60代男性
中部地区

自宅は津波で流失したが、お墓と畑だけは残しており、賛助会費も支払い、人足などには参加したいと思っている。

提案

15

空き家を有限活用する

トイレや貸し会議室として空き家を部分的に有料で開放したり、過ごしやすい夏季や集客イベント開催時に貸別荘として活用してもらったりするなどして、資源として有効活用してみてもいいでしょうか。

▶ 効果

- 空き家が閉め切ったまま傷んでいくのを防ぐ
- ふるさとに通う方々の一助となる

提案

16

人手が必要な人足をイベント化する

人手が必要な人足作業を、楽しいイベントと一緒にすることで、外部や避難先からも参加者を募集してみませんか。例えば、みんなで草刈りを実施後に、青空の下でバーベキューを行ったり、人足を手伝う代わりに農家民泊で交流したりすることで、地域外からも人手を募ることが可能かもしれません。

▶ 効果

- 交流人口の拡大
- 子どもの自然教育・生きる力を養う

事例 りんごの枝で焼きりんご 大野農園

福島県石川町にある大野農園では、2015年から毎年3月頃、りんごの剪定した木の枝を参加者全員で協力して集めて焼却し、焼きりんごをつくり、収穫した自然の恵みを食すイベントが開催されています。事前申込制の50～100人限定募集で、ファミリー世帯、老夫婦、友人同士等が参加されており、リピーターも多々みられます。参加費は1000～1500円で、りんごの枝拾いという単純作業に、外からも人を呼び、自然体験のできる楽しい行事にしています。



↑ 2018年3月、子どもも必死で枝拾いしています。
← りんごの枝焼却の様子

事例 地方に関わるきっかけプログラム

女川フューチャーセンター Camass

「地方の課題と可能性を体感し、地方との関わり方を考える2日間」と題して、地方に関わりたい方に自分なりの関わり方を考えるヒントとしてもらうため、2泊3日のプログラムが組まれています。震災前後のまちづくりのお話や、女川町で活動されている方々のお話を聞くことができ、魚市場見学・山林フィールドワーク・中心市街地散策を通して町内を広く知ることができます。また、懇親会やワークショップも行われ、地元の方々と濃い2日間を送ることができるため、外の人にも継続的に関わりを持ってもらう可能性にもつながっています。参加費は48,000円(往復交通費除く)、定員8名で、年4回開催されています。



↑ 女川フューチャーセンター Camass

事例 若者の集い 川房行政区

川房行政区では、2015年度から、年に1回お盆の時期に、行政区内の若者を中心に集まり、外部講師を招いた講演会や懇親会が開催されてきました。会の中では、「当面は帰れないけれど、本当はふるさとに帰りたい…」という本音や「川房を花いっぱいにしたい」「こういう会を続けたい」という声が聞かれ、年に一度みんなでふるさとを想う日になっています。特に若い世代に焦点を当て、将来世代のことも見据えた行政区の意思が窺えます。2016年は、ロイヤルホテル丸屋で開催され、若者20人程度(20～50代・市内のみならず首都圏からも参加)＋行政区内役員(区長・除染委員会・賠償委員会・地域再生委員会)が参加されました。



↑ 2016年8月、ロイヤルホテル丸屋にて、講師として窪田特任教授が呼ばれ、講演＋ワークショップを開催しました

地域を彩る

生活の場である地域を彩りあるものにして、小高に暮らす皆さんが、健康的に楽しく生活を送ることができるようにしましょう。公会堂や神社のような既存の場所を整備するだけでなく、みんなが普段利用する道をきれいにしたり、景観植物を植えたりすることで、新しく象徴的な場所を創出することができます。それらの場所や道を地域の軸として定め、その周りは地域に関わるみんなで力を合わせて維持管理していく体制を取っていく必要があります。



提案

17

地域のさんぽ道マップを作る

地域をめぐるさんぽ道をみんなで共有する、さんぽ道マップを作りましょう。眺めの良いルート、地域の歴史を感じ取れるルートなど、複数のルートを決めるのも良いかもしれません。イメージ地図のように、散歩道の設定と同時に地域を彩ることのできる取り組みも行っていくでしょう。詳細は提案 18～21 をご覧ください。

- ▶ 効果
- 作製を通じて地域の魅力や価値を共有

さんぽ道マップのイメージ

